『異本義経記』の構成

山本　淳

はじめに

『義経記』、能や幸若、御伽草子など「判官もの」の一展開として、近世初期に成立したとされる『異本義経記』がある。[一]『義経記』にその構成を倣いながらも、その名が示す通り内容は全くといってよいほど異なっている。特徴として、記録調の箇条書の文体、本文の後に挿入されたと思われる一段下げの注記の部分を持つこと、他にはみられない独自のエピソードを採り込んでいることなどが指摘できる。

さて『異本』に対するこれまでの研究は、成立時期に関する推定、依拠資料の考証、本文構成の特色の指摘、『異本』以降の諸文献への享受のされ方に関するものがその主なものである。[二]しかし「なぜ」「どのように」『異本』が成立したのかという編纂意図、及び背景に関する具体的な考察は未だなされていないといえる。例えば高橋貞一氏が先鞭をつけられた依拠資料についての考証は、作品構成上の特色とからめながら大城実氏が具体的な検証をされている。[三]では大城氏の検証結果以外に、どのような構成上の特色が指摘できるであろうか。本稿は『異本』成立の背景とその環境を究明する前段階として、まず新たな作品全体の構成上の特色を解析することでその方法・意図を考察していくものである。

一、全体の構成

まず、『異本義経記』全体の構成の図表を掲げて検してみよう。[四]

『異本』は、義経の生い立ちから源平の合戦を挟んでその死去までを題材としており、構成はほぼ『義経記』に倣っている。『義経記』巻四までの前半生が『異本』の上巻に相当し、巻五以下の失意時代が下巻に相当する。しかし詳細に見ていくと、『義経記』でいえば巻一と巻二、『異本』では「1義朝子女」から「9湛海被斬」に相当する流れがほぼ同じであるのに対し、弁慶の登場以降は、弁慶が特に中心となる『義経記』巻三や巻七、さ

（図表「全体の構成」）

【巻上】

1 義朝子女
2 義経出生・鞍馬入
3 聖門坊
4 遮那王貴船詣
5 橘次季春・深栖陸助重頼
6 遮那王海道下
7 遮那王奥州下着
8 鬼一法眼・義経上洛
9 湛海被斬
10 増尾十郎権頭兼房
11 武蔵房弁慶
12 常陸房海尊
13 鈴木重善
14 鷲尾三郎・源八広綱・江田源三・熊井太郎・駿河次郎
15 備前平四郎
16 鎌田兵衛娘牛王
17 関原与市・牛王最後
18 義経奥州下向
19 義経平家追討
20 義経大嘗会前駆
21 屋島合戦
22 壇浦合戦・義経景時不和

義経の出自／鞍馬修行／奥州下向／鬼一法眼物語／義経の郎等獲得／牛王物語／奥州下向／源平合戦

生い立ち／得意時代

【巻下】

23 義経鎌倉下向
24 土佐房被斬
25 義経都落
26 静鎌倉下向
27 梶原景茂静無礼
28 義経多武峰入
29 禅林房覚日糺門
30 常盤糺問
31 守覚法親王述懐
32 義経小舎人童五郎丸
33 堀弥太郎景光生捕
34 佐藤忠信討死
35 南都勧修坊得業聖仏
36 山口太郎家任
37 景時家人河津小五郎
38 鈴木重家
39 義経討死
40 義経室家仕女物語
41 義経奥州下向
42 頼朝奥州征伐
43 秀衡死去
44 忠衡討死
45 義経首葬

頼朝との対立／義経都落／義経周辺の人々の受難／義経の死／奥州藤原氏の滅亡／奥州合戦／北国落／義経の死

〔時間の重複個所〕

失意時代

らに義経一行の吉野落ちや忠信の吉野合戦の巻五が省略されている。その代わり「10増尾十郎権頭兼房」から「17関原与市・牛王最後」までには義経の家臣獲得などの、そして「26静鎌倉下向」から「38鈴木重家」までには家臣など義経周辺の人々の受難のエピソードがそれぞれ列挙されている。また「39義経討死」で一旦義経が死んでいるにもかかわらず、それまで描かれなかった「41義経奥州下向」から後日談的な「45義経首葬」までを加えて再び義経の死までを描き、最後は構成上の破綻をきたしているかのごときである。

二、章段構成

さて『異本義経記』は右のような構成を、なぜ採っているのであろうか。いま作品内の各章段の書き出しに着目すると、およそ『異本』には主に二つの傾向が見られる。一つは「武蔵房弁慶事」（上19ウ）」のように、一つの章段全体がある人物に関するエピソードの場合にその人物名を冒頭に示す形式である。もう一つは「安元三年三月二日、桂姫義経ノ息女ヲ産後、桂姫空敷ナル（上17オ）」のように、ある出来事の起こった年号・日付を冒頭に付ける形式であり、冒頭に限らず各章段内においても数多く見られるものである。

それでは以下各章段の冒頭部分を示し、『異本』全体の章段構成を見ていく。併せて、冒頭部分ではないが本文中で特に年号・日付が記されている個所も抜き出してみると、章段構成上の特徴として以下のことが指摘できよう（章段冒頭の記号は、Aは人物紹介、Bは年号・日付で始まるもの、bは『異本』全体の流れに符合しない日付・年号、Cはその他を表し、それぞれ〰〰は人物紹介、――は年号・日付とした。また年号・日付の記述部分は、文章の途中のものは改行して冒頭に示した）[五]。

【巻上】

A左馬頭義朝ノ息男以上十人ノ内…。（「1義朝子女」、1オ）

A大夫判官伊予守従五位下義経、母九条院官婢常盤。

平治元年、洛北紫野ニテ生ル。…、牛若丸二歳ニナルヲ抱キ、

平治二年二月九日ノ夜、清水寺ノ観音ヘ…。

（「2義経出生・鞍馬入」、2オ～ウ）

C常盤、清盛ニ馴テ息女ヲ産テ後…。…、

翌年二月、鞍馬寺ニ入ル。…。（同右、2ウ～3ウ）

A其頃四条坊門ニ聖門坊ト云ル者有。…。

（「3聖門坊」、3ウ～4オ）

C遮那王、早足飛越ナントシ給フニ…。

（「4遮那王貴船詣」、4オ～ウ）

A三条ノ橘次季春ト云金商人有。…。又下総国住人、深栖陸助重頼ト云ル者、…、

承安四年三月三日、鞍馬ヲ首途。…。

（「5橘次季春・深栖陸助重頼」、5オ～ウ）

A熊坂張樊ト云盗人…。（「6遮那王海道下」、6オ〜ウ）
C遮那王、青墓ニ着給ヒテ…。（同右、6ウ〜7オ）
C遮那王、尾張国熱田大宮司祐範ノ方ニテ、
三月十二日元服。…。（同右、7ウ〜8オ）
C義経、大宮司ノ方ニ四五日逗留マシマシ…。（同右、8オ〜ウ）
C義経、長カ許ニ逗留有シニ…。（同右、8ウ〜9オ）
C義経、其ヨリモ下総国ニ着給ヒ…、
九月中旬ニ出給フ。…。（同右、9オ〜10オ）
C上野国松井田ト云所ニ宿シ給フ。…。（「7遮那王奥州下着」、10オ〜ウ）
C平和泉ニ着給ヘハ…。（同右、10ウ〜11オ）
A都一条堀河ニ陰陽師鬼一法眼ト云者有…、橘次季春カ京上リヲ幸ニ、
安元二年二月十一日平和泉ヲ出給フ。（「8鬼一法眼・義経上洛」、11オ〜13ウ）
C義経、都一条大蔵卿長成朝臣ノ方ヘ…。（同右、13ウ〜14オ）
A鬼一法眼、生国伊予国吉岡ノ者トニヤ。（同右、14オ〜ウ）
C法眼衣ノ下ニ…。（同右、14ウ〜15オ）
A法眼門弟ニ、白川ノ湛海ト云者…、
十二月十六日ノ夜…。（「9湛海被斬」、15オ〜17オ）
B安元三年三月二日、桂姫義経ノ息女ヲ…。（同右、17オ〜18ウ）
A増尾十郎権頭兼房ハ…。（「10増尾十郎権頭兼房」、19オ〜ウ）
A武蔵房弁慶事、
安元二年六月十二日…、
同十七日…。（「11武蔵房弁慶」、19ウ〜20オ）
A常陸房海尊事…。（「12常陸房海尊」、20オ〜ウ）
A紀州熊野住人鈴木二郎重善ト云者有…。
安元二年ノ頃在京シタリ。八月十五日…、
b文治五年ノ春、藤代ヲ忍出テ…。（「13鈴木重善」、20ウ〜24ウ）
A鷲尾ハ播磨国鷲尾庄司武久カ嫡子也…。（「14鷲尾三郎・…」、24ウ）
A源八広綱ハ…。（同右、24ウ〜25オ）
A江田源三弘基…。（同右、25オ）
A駿河二郎清重事…。（同右、25オ〜26オ）
A備前平四郎成春事…。
安元三年ノ夏、或夜義経…。（「15備前平四郎」、26オ〜27オ）
A鎌田兵衛カ娘牛王ハ、…。
b安元二年正月三日、義朝政家十七回忌ニ…。（「16鎌田兵衛娘牛王」、27オ〜31オ）
B安元三年初秋ノ頃…。（「17関原与市・牛王最後」、31オ〜ウ）

C犬王丸カ母方ノ叔父鮫島平次ト云者…。（同右、31ウ～33オ）
C其頃、平相国ノ、常盤カ子共皆法師ニナセト…。…。
八月中旬、都ヲ立給フ。（「18義経奥州下向」、33オ）
B義経二十二ノ年、
治承四年頼朝公義兵ニヨツテ、平和泉ヲ出陣有。
十月廿一日…。
寿永三年正月…。
同ク二月…。
元暦元年八月六日、義経左衛門少尉ニナル。…。
（「19義経平家追討」、33ウ～35ウ）
A河越太郎重頼娘朝為姫ト云ル…、
八月十四日、重頼息女首途ス。…。
九月五日、婚姻アリ。（同右、35ウ～36オ）
B同十月廿五日大嘗会ノ行幸、義経前駆ス。…。
（「20義経大嘗会前駆」、36オ～37ウ）
B元暦二年二月十六日、義経八島ヘ首途ノ時、…。
（「21屋島合戦」、37ウ～38ウ）
C八島ノ軍ノ時、大臣殿宣ヒシハ…。（同右、38ウ～41ウ）
C壇浦ニテ平家ノ人々入水ノ時…。
（「22壇浦合戦・義経景時不和」、41ウ）
B元暦二年三月廿四日…。（同右、41ウ～42オ）
B同四月廿一日、梶原平三景時一族…。（同右、42オ～46オ）

【巻下】
B元暦二年四月廿四日…。
同五月、義経、宗盛公父子ヲ相伴…。
（「23義経鎌倉下向」、1オ～2オ）
C義経、是如何ナルユヘニカヽル事モ有ナン。…。
（同右、2オ～3ウ）
B同六月五日、頼朝公終ニ義経ニ御対面ナクシテ…。
（同右、3ウ）
B同九月、鎌倉ヨリ…。（「24土佐房被斬」、3ウ～5ウ）
C時ニ昌俊、下野国ニ置タリシ老母カ事ナント…。…、
同九月九日ニ鎌倉ヲ立テケリ。…。
同十七日、京着ス。…。（同右、5ウ～8オ）
B同十月三日、義経仙洞ヘ参リテ…。
（「25義経都落」、8オ～9ウ）
C義経、既ニ院宣ヲ申下シ宿所ニ帰リ…。（同右、9ウ～11オ）
B同十月廿九日、義経ヲ責ンカ為…。…、
同十一月朔日…。…、
同三日、義経、都ヲヒラキ給フ。…。
同五日、摂津国川尻ニ着給フ。…。…、
同八日、大和路ニ…。（同右、11オ～13オ）
A越前国ノ住人、斎藤ノ庄四郎ト云者有。…。
（同右、13オ～14ウ）
B文治元年十一月十七日、義経、吉野ノ山ヘ入給フ時ニ…。

同二年三月朔日、静並ニ母磯前司共ニ鎌倉ヘ召レ…。…、
同四月八日、若宮ノ宝前ニテ芸ヲ施ス。…。
（「26静鎌倉下向」、14ウ～16ウ）
B同五月十四日、工藤左衛門尉祐経…。
（「27梶原景茂静無礼」、16ウ～18オ）
B文治元年十一月下旬、義経、山伏ノ姿トナリテ…。
（「28義経多武峰入」、18オ～ウ）
B文治二年五月下浣ノ頃、義経、鞍馬東光房ニ…。
因茲、六月三日…。（「29禅林房覚日糺門」、18ウ～21ウ）
B同六月六日、一条河崎観音堂ノ門前ニテ…。
（「30常盤糺問」、21ウ～23オ）
B同六月廿二日、義経、御室ノ辺ニ忍ヒテ居給フ由…。
或時、守覚法親王御所学ノ頃…。
義経ノ郎等伊勢三郎ニ…。…。
（「31守覚法親王述懐」、23オ～30ウ）
同七月四日、左馬頭能保朝臣ノ家人…。
（「32義経小舎人童五郎丸」、30オ～ウ）
C義経在京ノ時…。…、
文治二年ノ秋…。
九月廿二日、私用有テ…。
（「33堀弥太郎景光生捕」、30ウ～31オ）
A佐藤四郎兵衛忠信ハ…。…、
九月廿二日ニ、宇治ヨリ暫ノ暇申テ…。
（「34佐藤忠信討死」、31オ～32オ）
B文治三年三月、南都勧修房得業聖仏…。
（「35南都勧修坊得業聖仏」、32オ～34オ）
A但馬国ノ住人、山口太郎家任ト云者アリ。…。
文治三年十一月廿五日、家任、今出川ノ宿所ニ…。
（「36山口太郎家任」、34オ～36オ）
B文治四年ノ秋ノ頃…。
（「37景時家人河津小五郎」、36オ～38オ）
B同五年三月、北条五郎時連…。
（「38鈴木重家」、38ウ～41オ）
B同閏四月晦日辰ノ尅、本吉冠者高衡ヲ大将トシテ…。
（「39義経討死」、41オ～ウ）
B同年九月五日、夜ニ入テ…。
（「40義経室家仕女物語」、41ウ～43オ）
〔時間の重複個所〕
C義経、奥州ヘ落給シ時、…。
（「41義経奥州下向」、43オ～ウ）
C加賀国富樫介カ関所ヲ通給フ時…。（同右、43ウ～44オ）
C義経、平泉ヘ下リ着給ヘハ、秀衡方人シテ…。
（「42頼朝奥州征伐」、44オ～47ウ）
B文治三年十月廿九日、秀衡死去有…。…、
文治四年ノ頃ヨリ、常陸房海尊ヲ蝦夷ヘ…。
（「43秀衡死去」、47ウ～49ウ）

B同年六月廿五日ノ夜、勾当八秀実ヲ大将トシテ…。
（「44忠衡討死」、49ウ～51オ）
C因幡前司広元、和田義盛ニ云ルハ…。
（「45義経首葬」、51ウ～54ウ）

三、構成上の特色

まず書き出しの特色の一つである人物名を紹介する形式であるが、これはそのほとんどが上巻に集中している。上巻の冒頭（「1義朝子女」～「6遮那王海道下」）、鬼一法眼関係（「8鬼一法眼・義経上洛」）、義経の郎等などの関係者のエピソード紹介（「10増尾十郎権頭兼房」～「16鎌田兵衛娘牛王」）のように、特定の個所に集中し、それぞれが一つのグループを形成していることが分かる。上巻は四一段に分けられるが、その約半数に当る一九段がこうした形式となっている。対して下巻は二九段中三段であり、上巻と比べて数量に違いがみられる。

その内容は、紹介された各人物に関するエピソードであり、この形式を持つ章段は登場人物一人につき一つ配当されている。さらにこの形式で始まる章段の多くは『義経記』のストーリーに準じて配置されているが、その内容は必ずしも『異本』作品中の時間の流れに沿うものではなく、一つ一つ独立した章段を一定のグループに配列した感が強い（「10増尾十郎権頭兼房」から「16鎌田兵衛娘牛王」にかけてなど）。冒頭から「9湛海被斬」までは、ストーリー展開に即して配置されている。またこの形式以外に、「遮那王、青墓ニ着給ヒテ（上6ウ）」→「遮那王、尾張国熱田大宮司祐範ノ方ニテ（上7ウ）」→「義経、大宮司ノ方ニ四五日逗留マシマシ（上8オ）」のように、義経の行動を示す章段を連続させて『異本』のストーリー展開を示す形式もある。つまり、独立した登場人物のエピソードを列記することで作品が構成されているといえる。

しかし先述した上巻の義経の郎等などに関する各説話は、弁慶が義経の郎等となったという章段（「11武蔵房弁慶」）以外は、『義経記』にはないものである。このグループは義経の郎等獲得という内容で統一されてはいるが、直接作品の時間的連続性に関係しておらず、叙述形式もほとんどが説明調・記録調である。またそれ以外の文芸的叙述を有する章段（「10増尾十郎権頭兼房」「13鈴木重善」「15備前平四郎」「16鎌田兵衛娘牛王」など）は、『異本』独自の伝承である。これは、弁慶の獲得に関連して他の郎等獲得の説話を、ストーリー展開を一時中断してまで一括して列挙しようとしたためであろう。[六]

このように挿入説話によって話の展開が中断するという性格は、『義経記』には見られず、ここに『異本』の意図が表出していると思われる。ストーリー展開以外に各登場人物の人物伝にも関心があり、それらを収集し作品の中に列挙して提示する、いわば「登場人物のカタログ」としての性格を『異本』に持たせる意図であろう。

次に年号・日付を冒頭に示す特色であるが、上巻は六例と少ないものの下巻では逆に一八例と増えている。また年号の明記は本文記述においても顕著であり、特に下巻では「31守覚法親王述懐」の後半部（『或時』以降）や「41義経奥州下向」「42頼朝奥州征伐」といった『吾妻鏡』などの中世期の義経関係の資料にあまり見られないとされる説話を持ついくつかの章段[七]以外は全て、冒頭部や本文中に年号・日付を示している点が注目される。これは『吾妻鏡』などを典拠としていることによるものである[八]。

しかし、少ないながら上巻にも本文中に年号・日付を記す章段が存在する。上下巻を通して時間の流れを追ってみると、上巻の二個所（「13鈴木重善」「16鎌田兵衛娘牛王」）と下巻の「41義経奥州下向」から最後の「45義経首葬」までの計三個所を除けば、義経の出生からその死後の顛末までが、時間の流れに沿って配置されていることが分かる。

また『吾妻鏡』から多くを引用していることからも、年号・日付を明記することによって義経の一代記にリアリティー（史実性）を持たせようとしたことが分かる。これは、例えば鬼一法眼の娘が死んだ日や義経と弁慶が出会った年のように、史実性に乏しく伝承性の強い説話にすら典拠不明の年号・日付を明記していることからも伺える。

つまり各章段を編年体で並べていくことで、『義経記』とは異なる正史性を強く打ち出そうと意図したのである。逆に年号・日付を明確化できない説話は、たとえ『義経記』などで当時広く知られていても『異本』には収録されなかったともいえるのである。

では『異本』末尾（「41義経奥州下向」から「45義経首葬」）はどうであろうか。義経の生涯は「39義経討死」で終わるが、その日付は「文治五年閏四月晦日」であり（41オ）、続くその後日譚「40義経室家仕女物語」は「同年九月五日」（41ウ）となっている。しかしこれ以降の章段は、これまでの検証結果に反し構成上の破綻を見せ、義経の死により終結したストーリーが「41義経奥州下向」の北国落ち譚から再び始まり時間が逆行しているのである。この北国落ち譚と続く「42頼朝奥州征伐」には年号・日付が示されていない。続く「43秀衡死去」には年号・日付が付いているが、「文治三年十月廿九日（47ウ）」と「文治四年ノ頃（48ウ）」とあり、流れからすると「36山口太郎家任」の後にくるべき章段である。次の「44忠衡討死」で示される「同年六月廿五日（49ウ）」は、前段の「文治四年」ではなく義経の討たれた文治五年に相当するので、「39義経討死」の次が正しい。最後の義経の首葬についても日付が明記されず、出典も不明とされている。この時間の重複と錯誤は、時間の流れに正確に『異本』を構成する意図にはそぐわない。しかし、先述した「44忠衡討死」の冒頭部分に見られる年号のミスから考えてもやはりこの個所は未整理という感が強く、「40義経室家仕女物語」で終了する『異本』のストーリー展開からはみ出た北国落ち譚以降の説話を収録したという感が強い。

最後に、「26静鎌倉下向」から「38鈴木重家」までの章段につ

いて見ていく。これらは三例（「33堀弥太郎景光生捕」「34佐藤忠信討死」「36山口太郎家任」）以外は全て冒頭が年号・日付であるという形式であるが、その内容は「義経周辺の人々の受難」（図表による）と全て義経周辺の人物のエピソードが列挙されている。これを上巻の義経の郎等などに関する説話群と比較すると、章段の冒頭や叙述の面、時間の流れに関しては相違があるが、義経の周囲の人物が主な登場人物となっている章段を一括して配置するという点で共通していることが分かる。ここにも登場人物伝のカタログ的列挙という章段構成に対する意識が働いているのである。

おわりに

以上、本稿では『異本義経記』全体の構成上の特色を考察してきた。まとめると、まず『異本』は各登場人物のエピソードを随所に挿入するという手法を構成上の特色の一つとしていること。『吾妻鏡』などの正史的資料から典拠不明の伝承まで幅広く収集し、それらを一つ一つ年代順に配列するが、それは時にカタログ的列挙となり、ストーリー展開に破綻をきたしてまで関連する内容で一つの説話群を形成しようとする性向も持っている。

次に、各章段内の年号・日付を史実、伝承にかかわらず詳細に示すことで収録説話に一種の正当性を与え、時間の流れに沿ってほぼ正確に構成する編年体形式を採ること。また年号・日付が明記されているかで、『義経記』などのよく知られていた義経伝承をも取捨選択され、逆に今まで知られていなかった異伝・俗伝も、年号・日付が付いていれば（あるいは付けることによって）積極的に取り込んだ可能性があること。

これら構成上の二つの特色により、『異本』はそれまでの「判官もの」にはない作品といえよう。義経たちに関する様々なデータを網羅した新しい一代記を「正史」（あるいは『義経記』に対する「外伝」としての意味も持つ）として作り上げられたのであろう。その他の『異本』構成上の特色などについては、他日改めて検討したい。

注

（一）以下、『異本』と略す。諸本は次のとおり。

①叡山文庫蔵本（写二冊、江戸中期頃の写か）

②松井簡治氏旧蔵静嘉堂文庫現蔵本（写二冊、江戸末期頃の写か）

③松井簡治氏旧蔵静嘉堂文庫現蔵本（写一冊、江戸末期頃の写か）

以下の本文引用は②により、適宜①を参照した。翻刻は、漢字・仮名の別は全て②のままとしたが、慣用的な字体以外の漢字は原則として現行の活字体に改めた。引用に際し適宜句読点などを付けた。章段分け、章段名は高橋貞一氏のもの（同氏「異本義経記」（「仏教大学研究紀要」57号、昭四八・三））に従い、通し番号を各章段に付けた（上巻第一話「義朝子女」について上巻一丁表に記事がある場合、（上「1義朝子女」、1オ）としたが、「上・下」は付さ

れていない場合もある）。

（二）『異本』に関する主な先行論考は以下のとおり（分類は筆者による）。成立時期については、志田元氏「異本義経記」（「伝承文学研究」4号、昭三八）、同氏「異本義経記（下）」（「伝承文学研究」5号、昭三九）、倉員正江氏「『義経磐石伝』と先行史書」（早稲田大学国文学会「国文学研究」89集、昭六一）。依拠資料については、高橋貞一氏「異本義経記」（「仏教大学研究紀要」57号、昭四八・三）、大城実氏「〈研究ノート〉『異本義経記』本文のあり方についての検討ー義経伝承を載せる中世の諸文献との関係においてー」（「立教高等学校研究紀要」19号、昭六三）。本文構成については、大城実氏「叡山文庫蔵『異本義経記』の構造ー義経の婚姻関係を中心にー」（「軍記と語り物」26号、平成二・三）、大城実氏「『異本義経記』作者の一つの視点ー丹波国とのかかわりにおいてー」（「立教高等学校研究紀要」20号、昭六三）。享受については、島津久基氏著『義経伝説と文学』（昭一〇初版、昭五二再版、大学堂書店）、関英一氏「『義経記評判』の注釈態度ー引用書の検討を中心としてー」（「国学院大学大学院紀要ー文学研究科ー」、昭五九）、大城実氏「『異本義経記』諸伝本に関する考察ー特に『義経知緒記』との前後関係を中心にしてー」（「立教高等学校研究紀要」18号、昭六二）。

（三）大城氏「叡山文庫蔵『異本義経記』の構造ー義経の婚姻関係を中心にー」など。

（四）大城氏（三）論文収載の図表をふまえて、一部補正させていただいた。次頁に掲載。

（五）テキストでは、下巻五一丁表に『吾妻鏡』からの記事を一段下とせず本文としている。他の二本では一段下げていることから、ここでは章段に加えない。

（六）年号・日付を克明に記す『異本』は、時間の流れにかなり注意を払っている（詳細は後述）が、この二個所（「13鈴木重善」「16鎌田兵衛娘牛王」）にはそれまでの流れと符合しない年号・日付を付している。

（七）「42頼朝奥州征伐」は「21屋島合戦」と併せて、『異本』の典拠の一つと考えられる『太平記評判秘伝理尽鈔』との関係について、軍記・語り物研究会第二九八回例会（平八・九・二九）にて「『異本義経記』の成立とその背景ー『太平記評判秘伝理尽鈔』との関連をめぐってー」として報告した。詳しくは別稿で述べる予定。

（八）高橋氏「異本義経記」、大城氏「〈研究ノート〉『異本義経記』本文のあり方についての検討ー義経伝承を載せる中世の諸文献との関係においてー」参照。

（九）「六月廿五日」は忠衡が討ち死にした日。『吾妻鏡』文治五年同日条によると「奥州有二兵革一。泰衡誅二弟泉三郎忠衡一。年廿三。」とあり、正確には「文治五年」。

（やまもと・じゅん　本学大学院博士課程）